愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151　Tel:075-621-3849　Fax:075-621-1579
E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp　http://www.airinkan.net　振替:01020-5-39321
編集発行所:社会福祉法人イエス会 愛隣館研修センター　発行責任者:平田 義

89号

笑顔で暮らせるMJ　～矢吹文敏さんを囲んで　座談会より

2013年6月、「障害者差別解消法」が成立しましたが、京都府では、2012年3月より、「障害者差別禁止条例」策定に向けての検討が始められ矢吹さんはその検討委員の一員として携わってこられた。向島が誰もが住みよい街となることを願ってやまない私たちは今回の条例にどのような可能性があるのか、矢吹さんにお話を聴かせていただくことになった。

「障害者への差別をなくすための京都府条例」の前に

障害者への差別をなくし、社会参加を促す「障害のある人の権利に関する条約（障害者権利条約）」が 2006 年国連で採択され、2007 年に日本は署名。6 年後の今年、条約承認案が可決され、2013年12月に正式に批准された。

この間、「障害者基本法」(2011 年改正)、「障害者虐待防止法」(2012 年 10 月施行)、「障害者総合支援法」(2013 年 4 月施行)、「障害を理由とする．差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」(2013 年 6 月成立）の整備により、環境が整ったためとされている。しかし、これからどう中身を深めるかが大切だと矢吹さんの言葉が響く。

京都では、2009年に「障害者権利条約の批准と完全実施をめざす京都実行委員会」(府下 43 団体で構成、矢吹さんは事務局長。以下「実行委員会」）が発足し、「障害者差別禁止条例」制定に向けて、京都府知事や京都市長への要望書を提出。条例づくりへの先駆的な働きを担ってきた。現在の「実行委員会」の働きは、インターネットによる掲示板発行、広報活動などを行っている。

その後、2012年に、京都府は、矢吹さんら「実行委員会」に呼びかけ、「障害のある人もない人も共に安心していきいきと暮らせる京都づくり条例（仮称)」検討会議を開催し、これまでに 13 回の会議を行い、先進的な提言をまとめて終了。しかし、その後、京都府から示された骨子案は残念ながら検討結果を反映したものではなく、内容が不十分であった。骨子案に対するパブリックコメント 900 件を基に、なんとか改良を試みたいと語る矢吹さん。この条例が、誰もが住みよいまちづくりのきっかけにならないかと考えておられる。

条例がはたして身近に感じられるのか？

条例が整備されれば、障がいの有り無し関係なく安心して暮らせる社会がすぐに実現するのかと考えると、そうではない。

障がい者に関する条例は自分たちには関係のないもの、遠い話と感じる人は少なくないのではないか。また、障がい者差別を考えるとき、差別する人、される人の間に見えない壁をつくってはいないか。

実際に差別はある。だから法律もできる。しかし、矢吹さんのお話は、「それ以前に」人として尊重されることの大切さと、限られた情報の中で生きることの危うさについて、いくつかのキーワードと共に伝えくださった。

「障害者」と「健常者」

そもそも「障害者」と「健常者」の定義はどうなのか、境界線はどこかにあるのだろうかと矢吹さんは問いかける。

障害者基本法による「障害者」の定義は、「身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。」とある。

では毎日通院している人は、健常者なのだろうか？オリンピック選手が健常者なのだろうか？考え始めると、分けることは難しくなり、分けることに意味をもたたなくなるのではないだろうか。自ずと「人」として当たり前の存在に焦点が絞られるように感じた。

20年前と比べてどうですか？

ある障がい当事者たちに20年前と比べてどうですか？というアンケートを実施されたとき、「障がい者運動って何？」「差別って？」という回答があり、矢吹さんは衝撃を受けられたとのこと。障がい者が置かれている状況を知らされていないこと。限られた空間（自宅、作業所、通所施設、入所施設など）のみが、その人の社会となってしまっていることへの危うさを感じたと語られる。

また、2001年フィリピン訪問時、ある障がい児の母親に「将来、こどもをどうしたいか？」と質問したところ、「医者にしたい！弁護士にしたい！」と、自由な回答が戻ってきたという。車いすの支給もない制度の中にありながらである。

日本に住む障がい児のお母さんたちから同じような回答がくるだろうか？制度やルートが先につくられている中で生かされている日本の現状を危惧しながら、人として誰にでもある機会を純粋に受け止め、想像できるようなベースづくりをできないだろうかと思案されているとのことだった。

お世話する人、お世話になる人の構図

お世話する人よりもお世話になる人というイメージが強いのが障がい者ではないだろうか。しかし、矢吹さんはその立場を逆転することで、お互いが歩み寄れるのではないかと語られる。楽しく面白い企画を通して、普段お世話になっている人がお世話する人になれるような機会を積み重ねながらコミュニティーづくりがすすめられればと、あれこれ楽しい未来を描いておられる。

責任ある企画を意図的に仕掛けていきたい

すでにここ向島では、「向島二の丸・二の丸北あんしんネットワーク」や「マイタウンMJ」での活動など、向島が活気あるコミュニティーへと変化するためのうねりがある。このうねりに参画しながら、誰にとっても住みやすく、誰もが人として尊重される地域となるよう、責任ある企画を意図的に仕掛けていきたいと矢吹さんは語る。

さいごに

矢吹さんのお話には、答えのない漠然とした未来への不安ではなく、どう工夫しよう、どんなことをしようと、わくわくしながら未来について考えられる雰囲気が常に漂っている。眉間にしわを寄せたまま語り合ったとしても、きっと楽しく明るい企画は浮かんでこない。まずは、今回の条例づくりをきっかけに、人と人との距離を縮めることができないだろうかと考える。笑顔でつながることが増えれば、今よりもっとお互いのことを想像し合えたり、持っている力を出し合えたり、分かち合えたりできるコミュニティーへと少しずつシフトしていくのではないだろうか。

矢吹さんのお話を聴きながら、是非しかけづくりに加わっていきたいと感じさせられた。みなさん、一緒に楽しい企画を考えませんか？

（記：辻早苗）

▼▼▼マイタウンMJだより

京都文教マイタウン向島（以降、マイタウンMJ）が開所となってもうすぐ1年となる。お年寄り達が集まり一緒にご飯を食べるランチクラブやプラレールで遊ぶ企画等が行われたため、マイタウンMJは地域に住む方々から「ここはどんな場所？」と聞かれることは少なくなってきた。

夏から秋にかけてマイタウンMJでは、お馴染みとなったランチクラブや福島から避難してきたお母さん達が裁縫を行う会、京都文教大学の学生が地域の子どもと一緒に勉強をする学習会などが行われた。新しい企画としては、健康の悩みや簡単な健康診断を行う企画、福島とチェルノブイリに関する写真展が行われ、秋の祭典では休憩スペースとなった。

今後のMJは12月21日には料理自慢のひとたちが自慢の料理を振る舞う企画、3月にはひな祭りや第2回メモリアルキャンドルin向島ニュータウンが予定されている。

「マイタウンMJでこんなことをしたい」と考えている人がおられれば、マイタウンMJの寄り合い（不定期のため、京都文教大学フィールドリサーチオフィスに日程の確認をお願いします）に是非顔を出してくださいね。（記：内山慎吾）

広河隆一講演「チェルノブイリと福島」を聞いて

『３・１１で敗北したのだということを、もう一度思い返そう。私たちはすべて自然災害にではなく、人災に敗北し、こともあろうに２年後の今も敗北している』（DAYS JAPAN2013年３月号編集後記より）

去る１１月、フォトジャーナリスト広河隆一氏の写真展「チェルノブイリと福島」(ＭＪ)、及び講演会「原発事故と子どもたち」（京都文教大学）が開かれた。広河氏は、１０年前に雑誌『DAYS　JAPAN』を創刊し、戦争・貧困・原発・女性・環境などの問題に正面から取り組み、社会の矛盾を追及している。戦争の現場で見たことが、戦争に有利な報道に歪められていたためだ。常に弱者が犠牲になることへの悔しさを原動力に被害を受けた子どもたちの救援活動も続けている。

講演では、「今福島県で進められていることを解くカギは、かつてのチェルノブイリにある。そして今歴史は繰り返されようとしている」と指摘した。

チェルノブイリでは、事故から３年後、被災地住民は健康状況の悪化に不安を募らせていたが、ソ連当局（当時）は安全宣言を繰り返していた。ＩＡＥＡ（世界原子力産業）の調査が入り期待したが、発表されたのは「健康上の被害はない。食べ物も安全」との内容だった。しかし、広河氏が現地で実感している状況とは大きくかけ離れていたため、基金や子どもたちの保養などの救援活動を行った。小児甲状腺がんは稀な病気であるが、ヨーロッパ平均の約３千倍の発症率だった。早期発見が重要にも関わらず、ＩＡＥＡが原発事故と小児甲状腺がん多発の因果関係を認めるまで１０年かかった（しかし、不審な犠牲者の線引きあり）。会うたびに状態が悪化する子どもたちを見続けてきた。

また、７年後、原発から６０キロのベラルーシで、母親の母乳のすべてから放射性物質が検出されていた。「政府が安全と言えば安全なのか？」。食品が一旦流通するともうわからない。食品を混ぜて放射線量の数値を下げて販売している、なぜなら経済が破綻するためだ。福島第一原発事故の時、権威者たちは『どれくらいの放射能と告げるか？避難させるか？』と大論争だったと言う。しかし、大勢の避難は原子力産業の痛手となるとの政治的意図が見え隠れし、このような状況に陥り、福島は分断されてしまった。だが、軍は知っていたのだ、なぜならアメリカの核戦争を想定していたのだと言う。「いのち」より経済や原子力産業をとる日本、原発再稼働や他国への原発進出へと進む日本とは・・・

現在の福島では、子どもへの虐待の伸び率が最大である。仮設住宅では逃げ場がなく、親は子どもに向けてしまう。お母さんを助けなければいけない。被曝したか、あるいは今も汚染された地域に住む子どもたちの健康回復のために、広河氏は「沖縄・球美の里保養センター」を作り、子どもと保護者を毎月受け入れている。参加した母の手記が物語っている、『保養へ行く前の不調がすっきりなくなり、一時的に元気になりました。精神的に疲れていたのだと思います。空気や土や水がきれいで、食事もおいしかったので、私も安心して、その時だけすごくホッとしました』

子どもが人質にとられている。騙されてはいけない。「ひとりひとりのいのち」を守るためにも、我われが声を出して行動していかなければならないのだ。

「あいりん」佐藤雅裕

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

詩人柏木正行さん(1945-2006)の

魂に触れる㉒

顔

きみたち
どうして顔をゆがめているんだい
わたしの顔がゆがんでいるからかい

詩集　路　より

2013年7.8.9.10.11月の活動

7/7.11.21　喀痰吸引第３号研修
7/21　SIEA理事運営委員会、事務局会議

タイセミナー（2014年2月25日～3月4日）
参加者募集中！　TEL：075-621-3849
mail：siea@abelia.ocn.ne.jp

8/01　『遊隣』海企画
8/08-09『遊隣』キャンプ同志社リトリートセンター
8/12-13『遊隣』キャンプ　びわここどもの国
8/22　『遊隣』クッキング企画
9/26-29　SIEA済州島セミナー
10/17-18　デイ一泊旅行in　南紀白浜
10/27　秋の祭典
10/27-31　居連協有志　沖縄平和研修
11/6-7 デイケア・シサム一泊旅行 in　南紀白浜
11/16　JBF京都ブロック交流会
11/17.28.12/1 喀痰吸引第３号研修

フィリピン台風被災者への緊急募金
レイテ島への支援を!

去る 11 月 8 日にフィリピンのレイテ島、サマール島を直撃した台風 30 号により、被災された方は 1400 万人以上、家屋を失い避難民となられた方は 350 万人以上とされています。国際協力機関の支援が行われているところでありますが、イエス団でも独自に緊急支援を行うことにいたしました。

農作物が収穫できるようになるまで、命をつないでいくために必要な食料などを購入するためには、少なくとも 1 世帯 1 ヶ月約 6000 円が必要となります。みなさまからの温かいご支援をよろしくお願いいたします。

社会福祉法人・学校法人イエス団　理事長黒田道郎

【募集期間】第1次募集期間　12月9日(月)～1月31日(土)
【募金振込先】郵便振替口座:01140-8-75472　加入者名:社会福祉法人イエス団

＊通信欄に、「フィリピン台風支援」とご記入ください。また、寄付金領収書をご入用の方はその旨ご記入ください。＊振込手数料は、誠に勝手ながらご負担願います。＊領収書の発行は、振込控えをもって代えさせていただきます。

■□■■あいりんコラム

子どもが生まれるその数時間前まで、彼女は自分が妊娠していることを知らなかった。体調不良のため通院した病院から紹介された産婦人科で、帝王切開で出産したわが子はとても小さかった。

京都に来たのは、2 年前。家庭の事情で入所していた他府県の施設から、仕事が安定した実母が呼び寄せてくれた。小学校、中学校と普通学級にいたが、がんばっているのに勉強がよくわからなかった。いじめを受けたこともある。知的障害があるということがわかったのは、中学卒業のころだ。

最初は子どもの衣類の選び方すらもわからず、大きすぎる服や靴を購入したりしていた。保育士やヘルパーの丁寧なかかわりの中で、育児や自分に自信が持てるようになった。

「今が一番幸せ。この子がいるから、いろんなことががんばれる」

他人と関わることが怖いと感じたこともあった。でも今は生まれた子どものために、経済力をつけたいと、就労支援移行所で一般就職に向けた訓練を受けている。

(記：福野由記)

2013年　クリスマス献金のお願い　　―これからの"地域"を見据えて―

この向島の地に誕生してから、34 年。皆様方のご理解とご支援によって支えられ、活動を続けることが出来ましたこと、心より感謝します。

今年度もクリスマス献金にご協力頂きますよう、改めてお願いを申し上げます。

《クリスマス献金・要項》

目　　的：障がい児･者とその家族とが地域で安心して暮らしていくことができる為に、愛隣館研修センターの今後の活動を支援する

目標金額：3,000,000円

郵便振替：01020－5－39321　口座名：社会福祉法人イエス団　愛隣館研修センター

★お知らせ★

▽愛隣館研修センターは、十二月二八日～一月三日まで休館日とさせていただきます。

★編集後記★

▼89号完成▽ご意見ご感想お待ちしております(さ)▼沖縄県の仲井真知事が辺野古の埋め立て申請を承認した▼普天間の県外移設を公約に知事に当選したのも関わらずだ▼安倍政権の姑息なあの手この手に屈したのか▼「沖縄振興予算」の年間三千億円に目がくらんだのか▼いずれにしても沖縄県民の命どう宝の，マブイ＝魂をカネでアメリカに売り渡したのだ▼「アメとムチ」による沖縄支配に終止符を打たねばならない▼沖縄県庁前に座り込む県民の叫びに心が揺さぶられる▼辺野古新基地建設を断念させるまで共に闘おう！（ひ）